

令和4年度 ダビンチ入試（総合型選抜）

第1次選考

課題提示・レポート作成

（120分）

問題冊子

〔注意事項〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙の記入については、下記の事項に従うこと。
 - ① 必ず「課題提示・レポート作成 解答用紙」の指定された場所に収まるように記入しなさい。
 - ② 記入は、横書きとする。
 - ③ 欄外や裏面に記入してはいけない。
 - ④ 絵や図表を記入してはいけない。
3. 問題冊子1冊、解答用紙2枚、下書用紙1枚があることを確認しなさい。
4. 試験開始直後に、問題冊子が表紙1枚、白紙1枚、課題用紙8枚あることを確認しなさい。落丁・乱丁および印刷不鮮明な箇所などがあれば、手を挙げて監督者に知らせなさい。
5. この冊子の余白は適宜下書きに使用してもよろしい。
6. 試験終了後、解答用紙だけを回収します。解答用紙以外は持ち帰りなさい。

補足説明

1. 科目等名 課題提示・レポート作成
2. 補足箇所及び補足内容

Ⅱ

次の英文の①から④の各段落を
各々2行かつ日本語で要約しなさい。

課題提示・レポート作成 課題用紙

I

次の英文を読んで、下線部 ①、② を訳しなさい。 (配点率 20%)

(著作権の関係で掲載していません。)

< 出典 >

Donella Meadows, Jorgen Randers and Dennis Meadows, *Limits to Growth : The 30-Year Update*, Chelsea Green Publishing Company, 2004

使用・引用箇所 : 2~3 ページ

II

次の英文の①から④の各段落を各々2行で要約しなさい。 (配点率 20%)

①

②

(著作権の関係で掲載していません。)

③

④

<出典>

Ian Goodfellow, Yoshua Bengio and Aaron Courville, *Deep Learning*, The MIT Press, 2017

使用・引用箇所：2～3 ページ

<語句>

sterile: 無菌の

hard-code: パラメータやデータ等を容易に変更できないようにプログラム中に固定する。

unwieldy: 扱いにくい、ぶかっこうな

cesarean delivery: 帝王切開

Cyc、CycLは、アルファベットのまま表記してよい。

Ⅲ

以下の二つの文章は、いずれも橋本治『「わからない」という方法』からの抜粋です。それぞれの文章について、問いに答えなさい。(配点率 60%)

私のやり方は、結局のところ「①」である。これはかなり、自信のある人間の言うことである。自信があるのか、バカなのか。普通の場合、これは「②」であり、「③」である。

「わからない」と「やる」との間は、普通、順接では結びつかない。結びつくのだとしたら、逆接である。ただの逆接でも、やっぱりまだ順当ではない。逆接に「やらされる」の使役がついて、やっと順当になる。「②」は、ほとんど「④」の同義で、だったらこれは、「⑤」にしてしまった方がいい。「やりたくないこと」はやりたくない。そんなことを「やらされる」のは屈辱である。そんな記憶からはさっさと遠ざかりたい。だから、「⑥」は、「⑤」の過去形に、さっさと変えられてしまう。

「逆接」の上に「使役」がくっついて、しかもそれは、「過去形」にしたいようなものですらある。「わからない」と「やる」との間には、そのようなギャップがある。「わからない」と「やる」とは、なぜ素直に結びつかないのか？ それはつまり、「わからない」が「恥ずかしいこと」だからである。

「わからない」は、普通「やらない」に続く。「⑦」である。それはどういう状態なのか？ つまりは、「考えるだけでぐずぐずしている」である。「恥ずかしがっている」がどんな状態であるのかを考えれば、「わからない」が「恥」であることはすぐわかるだろう。「考えるだけでぐずぐずしている」とは、すなわち、「恥ずかしがっている」である。「わからない」とは、「恥ずかしいこと」なのだ。

「わからない」という恥ずかしい状態であるにもかかわらず「やる」——日本人の美意識は、当然ここに「逆接」を選ぶ。そんな恥ずかしいことを自分から進んで選びたくもないから、ここに「使役」を使う。「他人に命令されて仕方なく」である。そんな恥ずかしいことは忘れてしまいたいから、さっさと「過去形」である。これが日本人の美意識で、これを知らないのは、恥知らずである。「①」が「バカのやること」かもしれないのは、そのためである。

「①」が自信のある人間の発言であったとしても、この人間が「自信のある人間」と認定されるようになるためには、もちろん、かなりの時間がかかる。「自信がある」と「恥知らず」は、実のところ、表裏一体のあり方だからである。

問1. 上の文章の空欄①～⑦に入れるのに最も適当なものを、それぞれ下の選択肢a.～g.のうちから重複しないようひとつずつ選びなさい。

(選 択 肢)

- | | |
|------------------|------------------|
| a. わからないからやらない | b. わからないからやる |
| c. わからないけどやる | d. わからないけどやらされる |
| e. やりたくないけどやる | f. やりたくないけどやらされた |
| g. やりたくないけどやらされる | |

「恥知らず」のハードルをいくつか越えると、その先に「自信ある人」のゴールが待っている。しかし、その「自信ある人」が再びレースに出て、その時のレースで必ず「自信ある人」のゴールにたどり着けるかどうかはわからない。「恥知らず」のハードルを跳びそこねれば、そこでその人はまた、「自信 ①かじょう」の恥知らず」である。「自信」と「恥知らず」は表裏一体なのだから、どうしてもそういうことになる——つまりそれは、人間が挫折を必須とする生き物だからである。

すべての人間が挫折を必須とする生き物である以上、「自信」はいつか「恥知らず」に変わる。べつに不思議のないことである。そして、人間が挫折を必須とする生き物である以上、すべての人間は、いつか「わからない」というシチュエーションにぶつかるものである。それにぶつかって切り抜けるのが人間である以上、「わからない」は方法論でもなんでもなく、ただの「当たり前」である。問題は、その「当たり前」がいつ「特別な方法論」に変わらざるをえなくなったのかということである。私はそれを、終わってしまった二十世紀という時代のせいだと思う。

〔中略〕

二十世紀は、イデオロギーの時代であり、進歩を前提とする理論の時代だった。「その“正解である理論”をマスターしてきちんと実践できたら、すべてはうまく行く」——そういう思い込みが、世界全体に広がっていた。そういう状況の中では、「自分の現実をなんとかしてくれる“正解”はどこかにある」という考え方もたやすく生まれるだろう。その人達は学習好きになって、次から次へと「理論」を漁る。一つの理論がだめになったら、もう一つ別のナントカ理論へと走る。思想さえもが流行になったら、その後では、「流行」さえもが思想である。「それを知らなかったら、時代からおいてきぼりを食らわされる」——そういう不安感の下では、流行もたやすく思想になり、であればこそ、二十世紀末には、わけのわからない「宗教もどき」がさまざまな事件を引き起こした。

「理論の合理性を求めて、どうして人は宗教という超理論へ走ってしまうのか？」——二十世紀末の「宗教もどき」が引き起こした ②さんげき に対して、多くの人達はこのように首をひねった。しかし、その求められた「理論」が、「なんでも解決してくれる万能の正解」と一つだったとしたら、この矛盾はたやすく解決されるだろう。「なんでも解決してくれる万能の正解」は幻想であり、これはそもそも宗教的なものだからだ。

二十世紀は理論の時代で、「自分の知らない正解がどこかにあるはず」と多くの人は思い込んだが、これは「二十世紀病」と言われてしかるべきものだろう。「どこかに“正解”はある」と思い、「これが“正解”だ」と確信したら、その学習と実践に一路邁進する。二十世紀のそのはじめには社会主義があつて、これをこそ「正しい」と思った人達は、これを熱心に学習し実践しようとした。やがてそこにさまざまな理論が登場して、第二次世界大戦後の二、三十年間は、「一世を風靡したナントカ理論」の花盛りとなる。そこで激化したのは、子供の進学競争ばかりで

はない。大人だとてやはり、やたら^{ちよ}の学習意欲で猪突③もうしんをしていたのである。

学習——つまりは、「既に明らかになっているはずの“正解”の存在を信じ、それを我が物としてマスターしていく」である。ここでは、「正解」に対する疑問はタブーだった。それが「正解」であることを信じて熱心に学習することだけが正しく、その「正解」に対する疑問が生まれたら、「新しい正解を内含している（はずの）新理論」へと走る——これが一般的なあり方だった。

「どこかに“正解”はあるはずだ」という確信は動かぬまま、理論から理論へと走って、理論を漁ることは流行となり、流行は思想となる。やがては、なにがなんだかわからない“混迷の時代”となって、そこに訪れるのが、「正解である可能性を含んでいる（はずの）情報をキャッチしなければならない」という、情報社会である。

どこかに「正解」はあるはずなのだから、それを教えてくれる「情報」を捕まえないといけない——そのような思い込みがあって、二十世紀末の情報社会は生まれるのだが、それがどれほど役に立つものかはわからない。しかし、「“正解”につながる（はずの）情報を仕入れ続けなければ脱落者になってしまう」という思い込みが、一方にはある。だから、それをし続けなければならない。それをし続けることによって得ることができるのは、「自分もまた“正解”はどこかにある」と信じ込んでいる二十世紀人の一人である」という一体感だけである。だからこそ、情報社会の裏側では、④えたいの知れない孤独感もまた、同時進行でひっそりと広がって行く。情報社会でなにを手に入れられるのかは知らないが、情報社会の一員にならなければ、情報社会から脱落した結果の孤独を味わわなければならないからである。

そもそもが「恥の社会」である日本に、「自分の知らない“正解”がどこかにあるはず」という二十世紀病が重なってしまった。その結果、「わからない＝恥」は、日本社会に抜きがたく⑤かつことしてしまったのである。

しかし、その二十世紀は終わってしまった。終わって行く二十世紀には、「もしかしたらもう“正解”はないのかもしれない……」という不安感が漂っていた。どこにも「画期的な新理論」はない。理論の代用物でもあった「画期的なヒット商品」もない。パソコンやインターネットが画期的であったとしても、それがどこまで必要なかはわからない。なぜかと言えば、その“必要”は、「どこかに正解があるはず」という、二十世紀的な思い込みの上に存在するものだからである。よく考えてみればわかることだが、「なんでもかんでも一挙に解決してくれる便利な“正解”」などというものは、そもそも幻想の中にしか存在しないものである。「二十世紀が終わると同時に、幻滅もやって来た」と思う人は多いが、これもまた二十世紀病の一種である。二十世紀が終わると同時にやって来たのは、「幻滅」ではなく、ただの「現実」なのだ。

人はこまめに挫折を繰り返す。一度手に入れただけの自信は、たやすく役立たずになり変わる。人はたんびたんびに「わからない」に直面して、その疑問を自分の頭で解いていくしかない——これは、人類史を貫く不変の真理なのである。自

分がぶち当たった壁や疑問は、自分オリジナルの挫折であり疑問である。「万能の正解」という便利なものがなくなってしまった結果なのではない。それを「幻滅」と言うのなら、それは、「なんでも他人まかせですませておける」と思い込んでいた、不精者の幻滅なのである。

二十世紀に定着してしまったものは「個人の自由」だが、そこから生まれるのは、「自分の挫折は自分オリジナルの挫折である」と言い切る権利である。「自分オリジナルの挫折」は、結局のところ、自分で切り開くしかないものなのである。

二十世紀が終わって、人間は再び過去の次元に戻った。そこでは、困難を切り開くものは、常に「自分の力」だった。「自分の力」がふるえるようになる前に、「どうしたらいいのかわからない、なにがなんだかわからない」という混迷に呑み込まれても不思議ではない。人類は常に、そういうところからスタートしてきたのである。

「わからない」は、あなた一人の恥ではない。恥だとしたら、「この世のどこかに“万能の正解、がある」とばかり信じて、簡単に挫折しうる「自分自身の特性」を認めないことが恥なのである。「特性」がいいものだとは限らない。

「どこにも正解はない」という“混迷、”の中で二十世紀は終わり、その“混迷、”の中で二十一世紀がやって来た——そう思ってしまったら、もう二十一世紀は終わりだろう。「わかる」からスタートしたものが、「わからない」のゴールにたどり着いてしまった。これが間違いであるのは、既に言った通りで、であればこそ二十一世紀は、人類の前に再び訪れた、「わからない」をスタート地点とする、いとも当たり前の時代なのである。

<出典> 橋本治『「わからない」という方法』集英社、2001年
使用・引用箇所：16～18 ページ、20～25 ページ

問2. 上の文章の下線部 ① ～ ⑤ のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① かじょう
- ② さんげき
- ③ もうしん
- ④ えたい
- ⑤ かつこ

問3. 筆者は、上の文章の中で、「わからない」ということや、「自分オリジナルの挫折」について論じています。

筆者の見解を踏まえると、もしあなたが本学に入学した場合、本学でどのような「わからない」に直面し、どのような「自分オリジナルの挫折」を経験するだろうと予想しますか。また、それに対してどのように対応しようと考えますか。400字程度で、できるだけ具体的に説明しなさい。